二〇一八年度　卒業論文

鈴木大拙から続く妙好人の思想的研究とそこから見る宗教経験について

コピー厳禁

L150061
數藤　恭資

目次

序論……1
本論……3
第一章　妙好人研究について……3
第一節　妙好人とは……3
第二節　大拙の研究から見る宗教経験……4
第三節　大拙の弟子への継承……8
第二章　妙好人が生まれた地を訪れて……11
第一節　浅原才市の出生地「島根県温泉津」での調査……11
第二節　庄松の出生地「香川県三本松」での調査……19
第三節　妙好人の地を訪れて……20
第三章　土徳について……21
結論……24
註
参考文献

コピー厳禁

序論

今、「日本人は無宗教である」と言われているなか、ひと昔前の浄土真宗には、「妙好人」と呼ばれる信仰心の篤い人々が存在したことがしられている。いったい彼らはどのような人々だったのであろうか、また何がその信仰心を形成させたのだろうか。そこから学べることがあるのではないかと思い、卒業論文のテーマとして妙好人に関する研究をしようと考えた。

そういう関心をもって妙好人に関する様々な文献を調べる中で、菊藤明道氏の『妙好人研究集成』において、佐藤顕明氏が述べている『序　妙好人研究の意義』の文章中にあった「ある言葉」が強く印象に残った。それはつぎのようなものであった。

『妙好人研究集成』の大きな成果の一つとして、本派本願寺系の学究を中心とした妙好人の歴史的研究と、鈴木大拙先生やその弟子の柳宗悦や楠恭等による妙好人個々人の宗教体験の思想的考究、この二つの潮流が重なり合い統合されていく機縁を作ったといえるのではなかろうか。この二つに見えるものの源泉は元来一つであり、それは妙好人と呼ばれる人びとの純粋な信仰体験である。[1]

また、おなじ「序」の別のページではこのような文章に出会ったのである。

鈴木大拙先生には宗教体験そのものという視点があった。さまざまな宗教的文献の紙背に潜む生きた宗教経験を読み取る洞察力が、禅では盤珪禅師の称揚に繋がったし、真宗では才市や庄松などの妙好人を、日本だけでなく、世界に紹介する偉業を成し遂げることになったのである。それは、大拙先生が単なる学者ではな

コピー厳禁

かったからである。自らが、超越的世界へ入出自在な活きた宗教体験をつねに生きていたからこそ、文献の裏に輝いている生きた宗教体験に共感し、それを追体験し、咀嚼し、表現できたのである。[2]

その「ある言葉」とは「純粋な信仰体験」、「生きた宗教体験（経験）」である。なぜこの言葉が気になったのかというと、それは私が生まれ育ったお寺に関係している。私は、「竹原山正行寺」という福岡のお寺の僧侶の息子として生まれた。この正行寺には「僧伽」と呼ばれる共同体が存在する。僧伽については『岩波仏教辞典』に次のように定義されていた。

原義は集団、集会。古代インドでは、自治組織をもつ同業者組合、共和政体のことをサンガと呼んだ。これが仏教に採用されて修行者の集まり、教団の称とされた。[3]

「僧伽」は言葉の意味としては、修行者の集まりとあるが、正行寺における僧伽は出家者に限った話ではない。僧俗関係なく「教えを聞くために同行が集まっている共同体」になっている。

実際、正行寺には、同行が共に生活をし、修行を行う場があり、そこには多くの人が一緒に暮らしている。ただ暮らしている訳ではない。そこでは自身の悩みを聞いてもらったり、皆で研修をしたりする。これらは全て自分自身を見つめ直すために行う。私はここでの生活の中に前述した「生きた宗教経験」があると感じた。そのため、それが何なのか、なぜそう感じたのかが気になり、宗教経験について調べたいと思った。

そこで、本論文では、鈴木大拙の妙好人研究と、妙好人がどのようにして「生きた宗教経験」を得ることが出来たのかを中心課題として考察していきたいと思う。

二北一嚴祭

本論

第一章　妙好人研究について

第一節　妙好人とは

はじめに、妙好人研究を語る上で、「妙好人」とはどのような人達であるかを考えていきたい。「妙好人」という語が最初に登場したのは、善導が「分陀利華」について『観経疏』散善義に述べた以下の文章である。

「分陀利」といふは、人中の好華と名づけ、また希有華と名づけ、また人中の上上華と名づけ、また人中の妙好華と名づく。この華相伝して蔡華と名づくるこれなり。もし念仏するものは、すなはちこれ人中の好人なり、人中の妙好人なり、人中の上上人なり、人中の希有人なり、人中の最勝人なり。[4]

このように、妙好というのは、蓮の花のことを示す「分陀利華」の美しさを讃えての言葉であるが、それを人間に対しては、その信仰の美しさを喩えたのである。

次に、鈴木大拙の論じ方から見ていく。鈴木大拙の著書『妙好人』には次のように定義づけられている。

親鸞は『歎異抄』に、「みだの五劫思惟の願は、よくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人のためなりけり」というが、なるほどここに宗教経験の本質があると言い得る。宗教は個己の生活だからである。しかし、いそぎ佛になりて、大慈大悲心をもて、思うが如く、衆生を利益することがまた浄土の慈悲であることを忘れてはならぬ。前者は往相廻向で、後者は還相廻向である。この二つは決して離して考えるべき事項でない、いわゆる車の両輪である。「親鸞一人のため」は、やがて一切衆生のためでなくてはならぬ。親鸞一人が分散して

コピー厳禁

他己の衆生となり、一切の衆生が一かたまりになつて「一人の親鸞」になるのである。が、他力宗の長所はすなわちその他力性の強調せられるところにあるので、特に妙好人なる人々は、絶対他力の温泉に、つかりすぎ、ひたりすぎるのである。この点において大いに彼らの徹底したもののあることは認めなくてはならぬ。

他力宗の感化力の甚深性を思いやるべきであろう。[5]

また、『日本仏教の底を流れるもの』には、このように述べている。

「妙好人」と云ふのは、「至上の幸福を掴んだ人」と云ふ意味である。…（中略）…妙好人は無學ではあるが眞の眞宗信者である。彼等は理窟を云はない。知的に議論はしない。只ひとへに自らの内に經験したものを日常生活の上に實践して行くだけである。彼等は自己表白をやる場合でも氣取らない。眞實心から出るままを述べる。それ故妙好人の言辭は心の奥底からぢかに湧き出るものであって、彼等の信仰内容に直接につながるものである。眞宗が信者に對して働きかけ、又信者に要求するのは正にこれなのである。[6]

以上のことから、私は「妙好人」は「日常の中で他力に身を任せてありのまま素直に受け取る人々」であると考える。その、ありのまま素直に受け取っていることが、無垢な白蓮華に例えられるのである。

第二節　大拙の研究から見る宗教経験

ここでは、鈴木大拙が宗教経験について、どのように考えてきたか。また、その実践者である妙好人をどのように研究してきたのかを著書を通して見ていく。しかし分量の都合上、全ての著書を取り上げるは困難である。

コピー厳禁

そのため、私が重要だと思う著書を取り上げて論じようと考える。したがって、大拙の詳しい生涯やその他の著書に関しては、菊藤明道著『鈴木大拙の妙好人研究』に掲載されているのでそれを参考にしてもらいたい。

私が、宗教経験を論ずる上で重要に感じた著作は、『宗教経験の事実』（昭和十八年出版）、『日本的霊性』（昭和十九年出版）、『妙好人』（昭和二十三年出版）の三冊である。これらを選んだ理由は、鈴木大拙が宗教経験について、そしてその実践者として妙好人を取り上げていることが確かめられるためである。それでは、それぞれの著作について論じていく。

一つ目は『宗教経験の事実』である。これは妙好人に関する最初の本格的な書物である。大拙が庄松のことが書かれている『大乗相応の地』と出会い、ここから妙好人の精神に傾倒するようになる。私がこの著書を読んで印象に残ったのは次の文章である。

庄松は無縁の大悲の中に始めから居るのであるのを、おせっかいな和尚さんが弥陀や浄土の話をしたので、庄松は動き出した。じっとして居れば、矛盾も迷いも何もなかったのである。が、一旦動き始めると、それは逃げまわると云う意味になって、阿弥陀さんは、彼を追い駆けまわすと云うことになる。向わんとすれば乖くのである。併し乖くことによりて人間は人間に帰ることができる。動き出さねばならぬように出来て居るのが人間である。即ち、人間は阿弥陀さんに逐いまわされる時に、本当の人間になるのである。それは何故かと云うに、いくら逃げおえようとしても逃げおえられぬことを自覚して、追い付く弥陀の手に自らを投げかける時が屹度あるからである。…（中略）…また宗教的に云うと、求むるところあれば必ず応ずである、

北一厳禁

叩けば必ず開かれんである。併し真宗的庄松の体験では、求むとか、叩くとか云う能動的方面よりも、向こうから下されると云う受動的心理の方面が、圧倒的に強いのである。求むるから与えられ、逃げるから追い駆けられるのであるが、経験事実の上では、与えられ、攫まえられるのが最後の事実だから、能動の方は閑却せられて、受動面のみが当事者の意識全部を占有することになるのである。[7]

この文中で重要に感じたのは、庄松の体験までの流れである。まず、「逃げるという意味になって阿弥陀がそれを追いかけ回す」こと。この逃げるは、自分でなんでもしてしまおうとする自力であると私は考える。他力から離れるのであるから逃げると言っても過言ではない。

次に、「逃げおえようとしても逃げおえられぬことを自覚して、弥陀の手に自ら投げかける」ところ。これは、自力でやる中で自分ではどうしようもできないものに直面することである。自分で対処できないからこそ悩み不安になるのである。そこに反省し、阿弥陀仏におまかせするのである。

最後は、「与えられ攫まえられる」ことである。これは阿弥陀仏におまかせをすることで真宗の教えが全て自分のこととして受け取ることができることである。これらのことを踏まえた「阿弥陀の教えが自分のためにあるという気づきまでの一連の流れ」こそ、宗教経験であると私は考える。

二つ目は『日本的霊性』である。この書で大拙は日本的霊性について次のように述べている。

霊性は精神の奥に潜在しているはたらきで、これが目覚めると精神の二元性は解消して、精神はその本体の上において感覚し思惟し意識し行為し能うものと言っておくのがよいかも知れん。即ち普通に言う精神は、

©厳禁

精神の主体、自己の正体そのものに触れていないものだと言ってよいのである。宗教というものから見ると、それは人間の精神がその霊性を認得する経験であると言われるのである。宗教意識は霊性の経験である。精神が物質と対立して、かえってその桎梏に悩むとき、みずからの霊性に触着する時節があると、対立相克の悶えは自然に融消し去るのである。[8]

また、大拙は同書で「宗教は上天からくるともいえるが、その実質性は大地に在る。霊性は、大地を根として生きている。」[9]と霊性について説明し、さらに別の箇所では、次のように述べている。

霊性は、どこでもいつでも大地を離れることを嫌う。霊性は最も具体的なることを貴ぶ。何が具体的かというと、哲学的にはなかなかの問題であるが、ここで言うのは、常識での範囲でのことである。山を山と見、水を水と見るのが、具体的な見方なのである。水を冷、湯を暖と感ずるのが具体的な感じ方なのである。大地を離れぬというのもそれである。[10]

霊性は、精神の奥つまり自分を離れた存在のはたらきであり、大地に根ざしている。そして、それをありのままに受け入れることが霊性の重要な点であると私は考える。

三つ目は『妙好人』である。私がこの著書で重要に感じた点は以下の通りである。

浄土系思想はいうところの他力宗であるから、信者の受動的態勢を、その生活の各方面に強調するのは自然である。妙好人には特にこの傾向がある。普通に忍苦の生活と認められる生活状態でも、彼らは何らの不平をも訴えないでいる、或は却ってこれを感謝するという気分さえ見える、いわゆる法喜禅悦である。彼らの

北一厳禁

生活は、「ありがたい」・「勿体ない」・「かたじけない」などという一連の感情で貫かれている。[11]

先にも述べているものと同じく、妙好人は日常生活の中で霊性の用きを得ている。この日常生活での気づきは、『日本的霊性』で述べた大地に根ざすことと同義である。そして、「ありがたい」・「勿体ない」・「かたじけない」のようにその日常生活の中で、阿弥陀のはたらきに対して感謝の気持ちしかないのだと私は考える

以上のことから、私は、鈴木大拙にとって宗教経験は「日常の中で、自力ではどうにもならないことに直面した時、阿弥陀仏のはたらきが自分のためであると自覚し、逃げずにありのままを受け入れていくこと、そしてそこに感謝をすること」であると推察する。

第三節　大拙の弟子への継承

ここでは、鈴木大拙の妙好人研究が弟子にどう引き継がれていったのかを見ていく。弟子の中でも直接師事した楠恭氏（以下楠氏で呼称する）と佐藤顕明氏（以下佐藤氏で呼称する）の二人に絞って見ていきたいと思う。確かめる項目としては二つある。一つ目は、鈴木大拙へ師事するきっかけ。そして、二つ目は楠恭と佐藤氏、それぞれが大拙の著書を編訳しているので、それらの序や、あとがきを通して、何を受け継いだのかを調べていく。以上の二点から、大拙の研究のどこに魅了されたのかを見ていく。

まず、楠氏である。楠氏は二十三歳の時に大谷大学哲学科で宗教学を専攻した。その時の主任教授が鈴木大拙だった。そこから鈴木大拙に師事し、彼の妙好人研究を支えた。

©一厳禁

一つ目の、大拙に師事するきっかけとなったのは、当時、大拙から言われた言葉「宗教の核心には宗教経験があってこそ触れることができる。仏教やキリスト教など高度の宗教の基礎にはそれぞれの宗教経験がある[12]」である。ここから分かるように大拙が当時から宗教経験を大事にしていたこと。そしてその考えに楠氏も感動したことが分かる。

次に、二つ目の視点から見ていく。楠氏は大拙著『日本仏教の底を流れるもの』の編訳をした。その序には次のように述べている。

日本人の精神の底にある本願の生活感情は日本人の滅びざる個性の一つとして何処までも世界性を持つものでなくてはならない。我々は自らの中にある宗教的個性を強く自覚して、それを世界の人々の幸福のために働かさねばならない。云はば弥陀の本願の心と強く呼応した我々の本願の心情を十分自覚して、それを世界の幸福のために働かさねばならぬ。[13]

ここからわかるように、楠氏は自分たちの中にある宗教的個性を自覚しそれを周りの人のために働かせるべきであると述べている。これは、自分が得たものを周りの人にも振り分ける「妙好人」の自利利他円満の姿と同じである。

次に、佐藤氏について述べていく。佐藤氏は師事することになったエピソードを『真宗入門』で説かれていた。そして、そこに大拙から受け継いだ大切なものも含まれていると私は感じた。そのためどちらも同じ文章から論じていきたいと思う。

北一厳祭

京都大学の大学院で宗教学を学んでいた頃のことであるが、自分自身の進路に迷うて、信仰上の師である正行寺の恵契法母に相談すると、「大拙先生のところに行きなさい」という指示があった。石田正實氏に連れられて、先生にお願いに参上すると、先生は才市のノートを取り出して来て、しばらく石田氏と法談の後、私に向って「哲学を勉強したんなら理屈はわかっているだろうが、南無阿弥陀仏に成ってしまうだけだよ」とおっしゃった。これを電話で法母に報告すると即刻「南無阿弥陀仏のはたらきを体得しに参りましたといったかね？」という問が返って来た。当時の私は何もわかっていなかった。先生の著書には親しんでいたが、まだ禅の人だという差別識の残っていた私には、この一連の出来事がすぐには納得できなかった。今にして思えば、法母の信心の慧眼には、未だ会ったことのない先生の真実信が明明に映っていたのである。私が先生のところに参上したのは、決して他宗での修行のためというようなものではなかった。そういう差別識こそ、私の眼の曇りの根本原因であった。「南無阿弥陀仏に成ってしまうだけだよ」という先生の言葉は、その実地の宗教経験ー南無阿弥陀仏に成ってしまう念々が南無阿弥陀仏のはたらきの体得である生活ーから出て来たものにほかならなかった。[14]

大拙の「南無阿弥陀仏になってしまうだけだよ」。そして、恵契法母の「南無阿弥陀仏のはたらきを体得しにきましたと言ったのか」という、研究の師と信仰の師お二方からの気づきこそ、佐藤氏が大拙に師事することに至った契機である。また、その「実地の宗教経験を体得していくこと」こそ、佐藤氏が大拙から得た教えである。そこが佐藤氏の中心になったからこそ、序論で引用した大拙の得たような「生きた宗教経験」という気づきを得る

北◎厳禁

のである。

楠氏と佐藤氏、お二人が師事するきっかけは、どちらも宗教経験が関わっていた。これは大拙が宗教経験を最も重要に考えていたためである。それは揺らぐことなく大拙自身の中心に存在した。そして、その思いに弟子達は心を動かされ、受け継いでいったのである。

第二章　妙好人が生まれた地を訪ねて

第一節　浅原才市の出生地「島根県温泉津」での調査

妙好人が宗教経験を得ていた出身地はどんな場所なのか、文献調査だけでは分からないところを知るべく、実際に訪れて調査した。調査したのは、数多く存在する妙好人の中でも、大拙が晩年までその求道姿勢を探求し続けた「浅原才市」（以下、才市と呼称する）。そして、妙好人を知るきっかけとなった、「庄松」。今回はこの二人と関係が深い土地である、「島根県湯泉津」と「香川県三本松」を訪ねた。そこで知ったこと、感じたことを中心に論述していく。

はじめに才市ゆかりの島根県湯泉津に訪れた。そこは歴史と湯の町と名乗っており、昔、石山銀山の近くでそこでの銀鉱夫たちが訪れて栄えたことと、天然温泉が有名な街であった。日本海に面しており、当時、銀を輸送する船が往来していた港町であり、今もその面影が残る穏やかな雰囲気であった。

厳禁

温泉津ではまず、安楽寺を訪れた。安楽寺は才市の遺品や資料、そして有名な角の生えた自画像が所蔵されていた。また、境内には才市の「かぜをひけばせきがでる　さいちがごほうのかぜをひいた　ねんぶつのせきがでるでる」という宗教詩の石碑が設置されていた。

安楽寺ではご住職である梅田淳敬氏から才市の話をお聞きした。始めに地図を用いて温泉津を含む山陰地方の真宗の教化の由来について教わる。山陰というところは、才市だけでなく、善太郎、源左、金子みすゞなど、多くの真宗に関わる作品や逸話を残す人が多く誕生する。これは広島が念仏どころで、そこから教えが教化されていったのが要因である。また、江戸時代の中頃、益田市の近くで異安心（間違った教え）が広まった。それを正すために、妙好人伝の原作者で有名な仰誓和尚と、その息子である履善和尚が、島根県の市木にある浄泉寺に入られ、二代に渡って教化された。これもこの地で念仏が盛んになった要因の一つであった。

次に、才市の生涯について話をしてもらう。才市は幼少期に両親が離婚している。理由は諸説あるが、経済的に成り立たなかったためと言われている。その理由として、父親の要四郎は幼少期にお寺に小僧奉公に出されていた。そのため、稼ぐことが分からなかったとされている。離婚の際、才市は母方に引き取られた。その後、父親の要四郎は出家をして西教と名乗り、花を売って暮らしたり、小僧奉公でお世話になった涅槃寺さんで役僧として住職の代わりにお参りをするなどして生計を立てた。一方、母親は再婚した。そのため、才市は母親とも離れ、船大工の奉公にでる。この両親の離婚に対して、才市自身ショックを受けており、晩年、両親に対する思いを、「わしは世界一の放蕩人であります。親のことを死んでしまえばいいと思う。そんな自分が恐ろしいとも思う。」

コピー厳禁

と語っていたと。

才市が四十五歳の時、父親の西教が亡くなる。これがきっかけで色々考え直すようになる。才市の父親は、側から見たら乞食、負け組のような生活をしていた。けれど、幸せそうにしていた。そこから才市は、人間の幸せとはなんなのかを考えるようになる。そのため、後になっての口あいに「親の遺言南無阿弥陀仏」など、親のことを語るものが出ている。この頃からお寺に参るようになった。しかし、初めは仏法のことを分かっているわけではなかった。分からない中お寺参りをし、聴聞を続ける。そうして生活していく中で、六〇歳からやっとお念仏をいただけるようになる。そして、この頃からその感慨を「口あい」という詩で表すようになる。「口あい」はこの頃仕事にしていた下駄作りのカンナ屑や、木材の切れ端に書き、毎晩読み返してはその後燃やしていた。そうやって才市自身、周りに見せるようなことはしなかった為、才市がありがたい宗教詩を書いていると知られるようになったのはしばらくしての事だった。

知られるようになったのは、お寺の説法を聞いた後、喜びが口あいとして出てきたものを紙にまとめるようになってからである。それは、才市が、自身の感動が正しいものか納得するために、法話の講師であった僧侶に確認するためのものだった。

それが続き、近隣のお寺では「才市さんがありがたい宗教詩を作っている」と噂で広がる。安楽寺さんにも毎日御説法を聞きに来られ詩を確認された。そこで、当時の住職であった梅田謙敬が「せっかくだから（ノートに記録し）残しては」と勧める。才市は「そのようなものではない」と断り、なかなか残そうとしなかった。業を

コピー厳禁

煮やした謙敬が寺の小僧にノートを用意させて持っていかせた。そうしてようやくまとめるようになった。その後ノートは溜まりに溜まり百冊以上歌も五千首を超えて一万首程度になった。しかし、ほとんどは戦災で焼失してしまう。原因としては、才市の管理責任もある。ノートに残すようになったものの、その扱いは昔と相変わらず、人には見せない。だからと言って自分の作品として大切にするということもしなかった。その為、保管されることも、持ち出されることも無かったのである。そんな才市のノートが現在も残っているのは、当時の住職の甥っ子であった寺本慧達の功績である。慧達は安楽寺にもよく来られ、才市とも親しくなっていた。ちなみに、この方が本願寺系の雑誌に才市の口あいを掲載した事で、才市が全国的に知られるようになった。

その慧達がハワイに行くことになり、才市にノートを一部譲ってほしいと願う。しかし、才市はそれに対し「人に見せるものではないので、親しいあんたでもあげられない」と断った。慧達は「人に見せるのではなく、お互いの年齢を考えるとこれが最後の別れになるかもしれない、だから向こうでも才市さんのことを思い出せるように、形見としてもらいたい」と告げる。それならば、と才市は、今度は手元にあった七十冊ほどを渡す。それらの一部は空襲などで焼失してしまったが、一部が現存していたのでる。そこから鈴木大拙などが研究する元になったのである。

その後、才市に関するエピソードを四つ紹介してもらう。

一つ目は才市の角の生えた自画像の話。この自画像は七十歳ぐらいの時の姿を描いてある。この自画像が書かれた経緯は次のように伝わっている。

北二厳禁

才市を「寺参りを熱心にするから立派だ」と褒める人が多かった。しかし才市はそれがたまらなかった。なぜなら、自分は立派だから寺参りしたのではないと理解していたからである。もし立派ならば自分でもう悟ってしまう。立派じゃないからこそ寺に参っているのだと考えていた。つまり、自分が参るのは鬼が寺参りをしているのだということであった。しかし、そのことをそれらの人たちに訂正することはできなかった。なぜなら、才市はあれほどの口あいを書くが、実際は口下手だったため「それは違う」と言えなかったのである。それが続き、違うと言えないストレスが溜まって、ついに画家の若林春暁にお願いして自画像を描いてもらうことになった。描いてもらう上で才市は、条件を三つつけた。一つ目が「ツノを生やす」二つ目が「合掌をする」三つ目が「肩衣（今の門徒式装）をしている」ことであった。その自画像が年末にできた後、当時の住職が次のような漢詩を書き加えた。「有角者機　合掌者法　法能摂機　柔軟三業　火車因滅　甘露心愜　未到終焉　華台迎接」[15]この漢詩の始めの一行は、「角の有るは機　掌を合わすは法　法よく機を摂し　柔軟の三業」と読み、これは、「人間の自性からみれば、煩悩（角）を出すのは凡夫（機）の証拠である。その人間が如来のみ名を呼び、掌を合わすのは、如来さまのおはたらき（法）によるもの。如来の摂取の光に遇う人間は、心を照らされ、その光りは身より髄までとおって、煩悩は如来のお徳に染まってしまい。言葉や行ないや心の三業は柔らいでしまう」という意味である。確かに、才市さんの角がある姿も阿弥陀さまに摂取されて和らげられて穏やかな顔で合掌される。この姿を通して真宗の肝である「悪人であってもそのまま救ってもらう姿」を現した。

次の行は「火車の因滅し　甘露心にあきたる　未だ終焉に到らずして　華台迎接す」と読み、「地獄に通う迷い

北®厳祭

（火車）の種（因）は消え果て。 弥陀の名号・南無阿弥陀仏で心は満ち溢れ。 臨終を待たないで。 仏の座に迎え導かれるのである。」という意味である。

二つ目は、お寺参りが熱心だったことである。どんな法座にも参ってくるのである。ただ参るだけではなく、在家で報恩講があった時は、町を歩き回って「今日は〇〇屋で報恩講が勤まりますので参ってください。」また、あるお寺の法座が終わったら「次は、〇〇寺で法座がありますので参ってください。」と勝手に広報を始める。そして、法座では一番前に座る。当時は高座で一段高いところから説法された。そうすると才市さんは見上げるように正座をすることになった。その姿をみた周りの人からは「肩が凝りそうだ。」や、「ガマガエルが座っているようだ」と言われたとのこと。それぐらい熱心に説教を聞いているうちに、才市は喜びが溢れて「そこだ」「ありがたい」といった、合いの手を入れてしまう。挙句には、我を忘れて「やれありがたいの」と立ち上がって手をあげてその場で一回りする。気づけば、高座の真ん前で当然説教は止まり、周りからは注目される。恥ずかしくなってその場で小さくなるが、それで凝りたわけではなく、また別の日に同じことをしてしまう。それを繰り返したため、町の子供たちからは「お説教中に立ち上がるお爺さん」として有名だった。

三つ目は西楽寺で服部範嶺和上が説教された話についてである。その話の中で範嶺和上は「浄土真宗の信心を得るのは簡単な様で実は非常に稀なものである。どれほど稀かと言うと、富くじ（宝くじ）に当たる様なもの。当たった人の名前がこの本に書かれている。これから読み上げるから自分が当たっているかよく聞く様に」と言って、御文章を取り上げ「末代無知の在家止住の男女たらんともがらは」と言った。そのとき才市が「当たった」

北二厳禁

と声をあげて立ち上がった。これは才市が、御文章の「末代無智の在家止住の男女」と云う存在がまさに自分のこととして聞かれていたのである。

四つ目は才市が使っていた御文章のことである。実際に才市が使っていた御文章には、冒頭に「これもわしがため」と書かれていた。これは、一通一通全てに書かれていた。御文章を自分に対して書いてもらったのだといただいていた。これは、親鸞聖人が『歎異抄　後序』にて「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。」[16]と阿弥陀さまのお慈悲は自分のためにあったと受けとったものと類似している。

その後、今の人たちが才市をどれほど大事にしているのかを教えてもらう。湯泉津の温泉街には才市の口あいが書かれたぼんぼりが掲げている。そして銅像も作成されている。それらは才市顕正会が管理されている。温泉津の人たちが才市のことを慕っていることがわかった。

そしてお話の最後に、梅田淳敬氏にとって才市はどんな存在か質問した。住職も子供の頃境内にある石碑「風邪をひけば咳が出る…」をみて何を当たり前のことを言っているのだ。と思っていた。しかし安楽寺を継ぐことになって、聞かれた時に示しをつけなければならないと思い、そこから学び始めた。そうして、それが大切なことだと次第にわかるようになった。そういう意味では真宗を学ぶきっかけを才市にいただいたと語られていた。

次に、温泉津にもう一つある浄土真宗の寺院、西楽寺を訪ねた。そこでは温泉津ならではの特徴的な寺院の形態の話をしていただく。その特徴とは、報恩講や、葬儀は菩提寺にお世話になるが、それ以外の普段のお勤めや、説法、仏教婦人会などは近所のお寺にお世話になるのが普通というもの。その為、菩提寺であるということに関

コピー厳禁

係無く気軽に集まることができる。聞法することができる。これが、妙好人が生まれるほど信仰が盛んな土徳だと教えていただいた。才市の時代も同じで、実際に方々のお寺に足繁く通われたと言っていた。才市の信心は、才市個人で成せたものでは無く、周りの人と一緒に仏法を聞ける環境があったからこそであった。

最後に、才市の生家を訪ねた。温泉津には、才市の生家が商店や民家が並ぶ通りの一角に今も保存されている。ガラス障子の二階建てで一階には板張りの仕事部屋と畳の仏間とがあった。二階は行けない様になっていた。仕事部屋には才市さんが実際に使用していた大工道具が展示してあった。一部は当時使われていた様に展示されていた。才市の生活がどのようなものであったかが見て取れた。

また、才市の「口あい」を思ってか浅原才市和歌コンテストが行われていた。そして壁にはその作品である俳句や短歌が数多く並んでいた。以下に印象に残ったものを二首だけ紹介しておこう。

念仏に生きたる才市のよろこびを我が身に受くる御恩嬉しき

み名称え角の才市と知らされてこころ軽々憂世を往ぬ

また、大人だけでなく、地元の小学生の自由研究としても才市のことが調べられていたものが展示されていた。その際の学級新聞や彼らのお礼の俳句も掲載されていた。その一部には、「正直にいつも詩を書く才市さん」「温泉街を明るく照らす才市の詩」というものがあった。それらを見るだけでも、才市という人が老若男女を問わず親しまれ、いかに才市が地元に根付いた繋がりを持っていたのかが垣間見えるものであった。

二世厳禁

第二節　庄松の出生地「香川県三本松」での調査

三本松では庄松ゆかりのお寺である大覚寺は留守だった為、近所のお寺の大信寺にて庄松の話を聞いた。

まず、三本松周辺には土徳があるかを教えてもらう。三本松には東かがわ市仏教協会に二十五ヶ寺存在する。しかし、ほとんどが真言宗で二十五ヶ寺中、八ヶ寺しか真宗はいない。その為、土徳というものはあまりないと言われた。そんな中、庄松のことが全国的に有名になったのは鈴木大拙が取り上げたおかげであるとのこと。

次に、庄松はどんな人であったのかを聞いた。真宗の聞法で信心を得た人であり、方々に聴聞しに行った人であったこと。そして、「自利利他円満」する人だった。「自利利他円満」とは、自利は自らを利益する意味で修行の成果を自分一人が受けること。利他は他を利益する意味で自己の利得のためでなく周りのために尽くすことをいう。この両者を合わせて二利といい、自利利他円満はその両者を完全に両立させた勝れた状態であり、大乗仏教の目的とする仏の世界である。

それが分かるエピソードとして「嫁（かか）の相持ち」がある。庄松には与左衛門と仲蔵という二人の甥がいた。兄の与左衛門は分家をして妻を娶った。弟の仲蔵が家の跡取りになった。庄松が「与左衛門は新しい家だから。早々に御文をお迎えしなければ」と言うと、親族の皆が留めて御文は、しばらくは母屋（実家）から借りて、当分は相持ちでいいのでは。」と言った。すると庄松は「御文が相持ちで済むのなら、仲蔵は嫁を娶るのをやめて与左衛門と嫁（かか）を相持ちにしてはどうじゃ、どうじゃ。」と言った。

この話は、普通の人は御文を普通の本であると考えるが、庄松は「喜びの心がない者が喜ぶ心を得ることがで

©二巡禁

きる教えが御文だから、例えるなら自分の奥さんほど大事な物である」として、御文を相持ち程度に扱うことは絶対にダメだと言った話である。この様な場合、反対意見が出てきたとき、普通の世間では力の強い者や多数派の意見が通るが、このときは庄松さんの一言で満場一致で全員の意見が変わって御文を迎えること決まった。これが自分だけでなく、周りも変えた「自利利他円満」の姿であった。

その後、庄松さんのお墓と説教所に連れて行ってもらった。そこは、小砂(こざれ)という集落のあった場所で、その地域の方々は特に信仰に篤く、説教所では小砂門徒の庄松さんへのお供えがたくさん並んでいた。

また、小砂の人たちは、各家々のお墓を立てることはなく、遺骨は家の仏壇にのみ納める。これはなぜかと言うと、庄松が述べた「石の下には居らぬぞ、居らぬぞ。」(大信を授かった者は、極楽浄土へは絶対に行けるのだから墓や卒塔婆はいらぬ。石の下ではなく、お浄土に居るのだ。という話)の言葉を大事しているためである。

この話を聞いた時、庄松が亡くなった後もその教えが続いているのがわかった。妙好人が頂いた信心を周りの人も頂いていく。そうして一人では無く、全員が頂いていくありがたさに触れることができた。

第三節　妙好人の地を訪れて

今回、湯泉津と三本松に訪れて、どちらも、その土地と人々に温もりを感じた。妙好人を生み出すのはその中での生活があったからだと私は考察する。温泉津では、信仰も盛んで、妙好人が生まれる要因になる形体があった。妙好人として後世に残っているのは才市さんだが、似た様な人は他にも存在した。事実、温泉津の信心を得

©北二厳祭

るのは富くじに当たるようなものの話では、「当たった」と叫んだ人は才市だけでなく、もう一人おばあさんも立たれたとのこと。三本松では土徳は無かったと聞いたが、小砂での教えが続いているところを見ると、お寺の数はあまりなくても、教化は伝わって根付いているのならば土徳といっても良いのではないかと私は考える。実際に妙好人自身がいたのは、とても昔であったが、今でもその姿や教えを大事にしている人々がいることがとても温かさを感じた。

第三章　土徳について

妙好人を調べていく中で、「土徳」という語を何度も聞いた。それだけ妙好人にとって重要なものだと推察する。しかし、私はこの「土徳」を何度か聞いたことはあったが、具体的にどのようなものか具体的に理解しているわけではない。そのためこの章で、改めて土徳とはどのように書かれているのかを深めていきたい。

そもそも土徳とは一体どの様なものなのか。調べる中でこれが柳宗悦の造語であると知った。そのことについて教学シンポジウムの記録をまとめた『真宗の土徳』にて、清基秀紀氏がコーディネーター挨拶として、次のように述べている。

「土徳」という言葉について少し説明させていただきます。辞書を引いても、「土徳」という言葉はどこにものっておりません。そういう言葉です。昭和二十年に民藝運動の創始者である柳宗悦さん（一八八九～一九

北一厳禁

六一）が、バーナード・リーチと共に、版画家であった棟方志功（一九〇三～一九七五）が疎開していた富山県の砺波平野を訪れます。その土地に暮らす棟方志功の作品が一層輝きを増したことに驚き、それがその地方の豊かな自然と念仏の生活の影響であった、ということを見出します。そしてそれを柳宗悦は「土徳」と名付けました。その土地に備わった徳ということです。そこに住んでいるだけで、知らずしらずのうちに土徳が身についたというわけであります。…（中略）…砺波だけではなく、念仏者を多く育てた真宗の盛んな地域、そのような文化を持つ地域で、「土徳」という言葉がよく使われるようです。[17]

ここで述べられている「砺波の豊かな自然と念仏の生活」は『日本的霊性』で述べられていた、大地を根として生きている霊性が用いている生活である。そして、土地には備わった徳があり、そこに住んでいるだけで知らずしらずのうちに身についた土徳とは、その用きからの宗教体験であると私は考える。

砺波の豊かな自然と念仏の生活を通して、作品が向上した棟方志功と、その出来事を通して、「土徳」を見つけた柳。この二人が当時のことをどのように感じていたのか、それぞれが文章に残している。そこから、何を感じたのかを見ていく。

はじめに、棟方志功である。著書『版極道』では次のように述べていた。

いままではただの、自分で来た世界を、かけずりまわっていたのですが、その足が自然に他力の世界へ向けられ、富山という真宗王国なればこそ、このような大きな仏意の大きさに包まれていたのでした。真宗妙好の宗根、在家仏人として、身をもって阿弥陀仏に南無する道こそ、板画にも、すべてにも通ずる道だったの

北◎厳祭

だ、ということを知らされ始めました。誰も彼も、知らずの内、ただそのままで阿弥陀さまになって暮らしているのです。その生活こそ、いままで思いも及ばなかったお助けそのものの生活ではないでしょうか。…（中略）…富山では、大きないただきものを致しました。それは「南無阿弥陀仏」でありました。衣食住でも、でしたが、それよりもさらに大きないただきものであったのです。[18]

この文中で棟方志功が述べた「いままで思いも及ばなかったお助けそのものの生活」や、「大きないただきもの」という言葉は霊性を体感した言葉である。そしてそれは棟方が当時、滞在してから三十年が経過してもずっと残っているように、得た後、忘れられずにずっと用き続けるものだと私は考える。

次に柳宗悦である。同地域で過ごした体験を次のように語っていた。

私はかつて越中の城端別院に滞在したことがあるが、一年中毎日説教がかかる。ない時は同じ町のどの寺かで行われる。ただに寺ばかりでなく、在家でも説教者を迎えていわゆる「御座」を開き、近在の人々が集ってくる。門徒は聴聞に熱心なのである。同じ念仏系の仏教でも浄土宗は、実際的に真宗ほどに在家との繋がりを持たない。その一理由は説教に情熱を傾けないためだといえよう。少なくとも仏法と民衆とを固く結ぶためには、説教が必要だと思われる。[19]

この言葉から、この砺波地域は仏法と民衆が、説教を聴聞することを通して繋がっている。真宗が生活に根付いていることがよく分かる。そこに柳も感銘を受け「土徳」と名付けたのである。

これらのことから「土徳」とは、真宗が根ざしているような霊性が用く生活の中で、知らず知らずのうちに得

引用・複製

ることができる体験である。

結論

宗教経験は他力のはたらきをありのままに受けて、全てが自分の事として聞ける。そしてそのはたらきに感謝する姿であった。それが妙好人の篤い信仰心の原点であった。そして宗教経験を研究した鈴木大拙の姿、言葉から弟子たちへと受け継がれていったこと。妙好人たちの姿勢が彼らの出生地でいまだに伝わっていたことからわかるように、その姿、言葉から信心は伝わっていく。このようにはたらき続けることこそ「生きた宗教経験」と言うのではないかと私は考える。

これに気付いた時、自分が自坊で経験したことを想起した。私は、研修会において「善光寺如来縁起」に触れ機会があった。その時、阿弥陀仏から伝わる仏縁の延長線上に自分がいて繋がらせていただいていたと気づかせていただいた。そんな中でつけていただいた法名「恭順」は「恭しく相手に付き従う」という意味があり、そうなれるべく願いを込めてつけていただいたのだと気付いた。

これも、私が先達の姿から気付かせて頂いた、はたらきであった。私にとっての「生きた宗教経験」であり、信仰の原点であった。このような大事なことを再発見できた縁である、仏縁の中で生まれ育ててきてもらったこ

コピー厳禁

と、指導教授にこの論考へ導いていただいたことに感謝を申して結びとさせていただく。

コピー厳禁

註

1 菊藤明道『妙好人研究集成』vii viii頁。
2 菊藤明道『妙好人研究集成』ix頁。
3 中村元『岩波仏教辞典』六三一頁。
4 『七祖篇』四九九、五〇〇頁。
5 鈴木大拙『妙好人』十四、十五頁。
6 鈴木大拙『日本仏教の底を流れるもの』一七四、一七五頁。
7 鈴木大拙『宗教経験の事実』十七、十八頁。
8 鈴木大拙『日本的霊性』十九頁。
9 鈴木大拙『日本的霊性』四十二頁。
10 鈴木大拙『日本的霊性』七十五頁。
11 鈴木大拙『妙好人』十二頁。
12 菊藤明道『鈴木大拙の妙好人研究』二六八頁。
13 鈴木大拙『日本仏教の底を流れるもの』四頁。
14 鈴木大拙『真宗入門』一四六、一四七頁。
15 梅田謙敬『『角ある者は機』『浅原才市自画像』上部に掲載
16 『註釈版聖典』八五三頁。
17 『真宗の土徳～地域に薫る念仏～』八頁。
18 棟方志功『版極道』一一〇、一一一頁。
19 寿岳文章『柳宗悦妙好人論集』七五頁。

コピー厳禁

参考文献

書籍

菊藤明道『鈴木大拙の妙好人研究』法蔵館、二〇一七
菊藤明道『妙好人研究集成』法蔵館、二〇一六
楠恭　金光寿郎『妙好人の世界』法蔵館、一九九一
楠恭『妙好人を語る』日本放送出版協会、二〇〇〇
浄土真宗教学伝道研究センター『真宗の土徳〜地域に薫る念仏〜』本願寺出版社、二〇一一
寿岳文章『柳宗悦妙好人論集』岩波文庫、一九九一
鈴木大拙『妙好人』法蔵館、一九七六
鈴木大拙『日本仏教の底を流れるもの』大谷出版社、一九五〇
鈴木大拙『真宗入門』春秋社、一九八三
鈴木大拙『宗教経験の事実』大東出版社、一九四三
中村元『岩波仏教辞典　第二版』岩波書店、二〇〇二
水上勉　佐藤平『大乗仏典〈中国・日本編〉第二十八巻』中央公論社、一九八七
棟方志功『版極道』中公文庫、一九七六
藤秀璨『大乗相応の地』興教書院、一九四三
由谷裕哉『郷土再考』角川学芸出版、二〇一二

論文

朝枝善照「妙好人妙性の一考察ーその史料的検討ー」一九七八
貴島信行「真宗における念仏僧伽の形成」二〇一八
佐藤　平「妙好人浅原才市の入信に関する一考察ー特にその親との関係をめぐってー」一九八一
佐藤平顕明「鈴木大拙のまことーその一貫した戦争否定をめぐってー」二〇〇七
末村正代「鈴木大拙における妙好人研究の位置づけ」『宗教哲学研究』二〇一七
原谷桜「宗教経験の分析概念としての気づき」二〇〇八

三巡目厳禁